



10月10日深夜の「御神輿渡御」

土木遺産の香 第82回

御代の刀のような「鞘橋」 香川県琴平町



株式会社建設技術研究所／東京本社／地球環境センター
細谷 州次郎／HOSOYA Shujiro
(会誌編集専門委員)

稀代の橋

「こんぴらさん」で有名な金刀比羅宮は香川県琴平町にある。御本宮は象頭山の中腹にある。象頭山の麓には金倉川が流れ、門前町である琴平町の中心街を南北に貫流している。金倉川は、土木技術者には「日本最大の灌漑用ため池である満濃池の水源の川」と紹介した方がピンとくるかもしれない。

金倉川は、潮川、宮川、襖川とも呼ばれる。これは、金倉川が金刀比羅宮の麓を流れており、宮の神事などと密接な関わりがあるからである。この川には、琴平町内だけでも、金倉川で最初の鉄筋コンクリート造りの祇園橋、表参道から金刀比羅宮大門へとまっすぐに通じる一之橋等、20を超える橋が架かる。それらの一つに、屋根のついた、珍しくも端麗なたたずまいの木造橋がある。

江戸時代に象頭山の景勝をまとめた『象頭山十二景図』という古図がある。金刀比羅宮の門前を描いたもので、1671

(寛文11)年頃の狩野時信の作とされる。この橋は、象頭山十二景の一つ「橋廊複道(屋根のある橋の意)」として、優れたビューポイントになっていたことを物語る。橋の名は「鞘橋」という。

滑稽本『東海道中膝栗毛』で有名な十返舎一九は、この橋について「上覆ふ 屋形の鞘におさまれる 御代の刀のような反り橋」と謳っている。

木造橋でありながら、400年の刻を越えて今なお存在感に溢れるこの橋は、なぜ存続できているのだろうか。

繰り返す流出と再建

実は、鞘橋は金刀比羅宮の所有する橋なのである。金刀比羅宮の資料によれば、鞘橋は「創建年月不詳」と記されており、1624(寛永元)年に金光院 別当 宥眼が改造した旨の記述が、記録上の初出となる。同資料には1771(明和8)年の洪水による流出をはじめ、流出と再建が数度あったこ



写真1 金刀比羅宮



図1 『象頭山十二景図』のうち「橋廊複道図(一部抜粋)」(金刀比羅宮所蔵)

とが示されている。

現在の橋は、1866(慶応2)年8月の洪水後に、阿波の講中によって1869(明治2)年に再建されたものである。「講中」とは聞き慣れない言葉だが、神仏を奉り、または参詣する同行者で組織する団体のことである。

江戸時代に高まった金毘羅信仰により、金刀比羅宮には全国からの講中による参詣・寄進が集まるようになった。現在の鞘橋も、その一つで、阿波麻植郡(現在の吉野川市の大部分と美馬市の一部)の講中の寄進により再建された。それは、鞘橋の8つの高欄の擬宝珠に刻まれた「阿州橋講中」の文字からも見て取れる。擬宝珠とは、高欄あるいは親柱の頂部を腐食から守るための飾りのことで、仏の教えの象徴である宝珠を型取り、橋を特別なものとする敬意が込められている。

鞘橋に擬宝珠が用いられているのは、金刀比羅宮が以前は神仏混淆であった名残でもある。

鞘橋のつくり

由緒ある金刀比羅宮だけに、冒頭の『象頭山十二景図』も含め、鞘橋が描かれた絵図は江戸時代から複数ある。元禄年間(1688~1703年)に狩野清信によって描かれた『金毘羅祭礼図』の鞘橋は、現在と同じく3つの屋根を持つが、1755年に描かれた『讃岐國金毘羅山象頭山金毘羅神社絵図』や1850年頃の『象頭山金毘羅全圖』の橋では、『象頭山十二景図』と同様に屋根が一層となっている。どの図においても橋脚は2箇所設けられている。

これらの図から、鞘橋は記録に登場した江戸初期には既に屋根付きであったと考えられる。屋根は、金倉川を境界として、より神聖な場所に踏み入れること意識づけや、心身を改めることを促すための役割があると推察する。このほ



写真2 鞘橋



写真3 阿波(阿州)の講中による寄進を示す擬宝珠の刻印

か、参道にかかる橋であることから、参詣者を、そして橋自身を、少しでも風雨から守るために屋根を付したとも考える。

1869年に再建された橋、つまり現在の鞘橋とそれ以前の鞘橋の大きな違いは、橋脚を取り除いたことと、瓦葺きを銅葺きに変えたことにある。これらの違いは、流下能力を上げるために橋脚を無くす必要があったことや、橋脚が無い分、自重を軽くする必要性から銅葺きにしたのであろう。また、両岸からの組だし構造であるため「浮橋」とも称されている。名の由来となる肝心の反り勾配は従前と同様であった。

鞘橋は長さ23.8m、幅4.5mである。主桁に使われている松丸太はアーチ形のものを選び、一本木ではなく、長径間の

ため2本を中央で添え木により合接したものである。この主桁を3列設け、加えて補助の桁、梁木、筋違い、横構を適宜配置した構造となっている。

意匠も尽くされており、正面は唐破風造り、上屋根は千鳥破風造りとなっている。橋の床版下の複雑な構造は、反りに合わせて付けられた広い桁隠しによって見えない。桁隠しによる外観が刀を連想させ、鞘橋の名の所以になっていると思われる。

屋根を支える梁、肘木などには、龍や象などの彫刻が施され、神橋としての風格を一層引き立てている。龍は琴平山が龍神の住む神聖な山とされることに、象は象頭山にちなんだものであろう。

■ 鞘橋の意外な一面

金毘羅参りをするためには、金倉川を渡らなければならない。その参道に架けられているのが鞘橋であり、稀な外見から、金毘羅参りのランドマークとなっていた。鞘橋をめがけて丸亀街道・多度津街道・高松街道・阿波街道・伊予土佐街道が集まる。これらの街道を総称して「金毘羅街道」あるいは「金毘羅往来」というが、この街道は官道のように整備されたものではなく、里人や参詣者の往来によって踏み締められて、いつしかできたものとされる。鞘橋は街道が交差する街の中心であり、往時も活況を呈していたことだろう。

前述した『金毘羅祭礼図』にも、その雰囲気は垣間見られる。この図は元禄期の例大祭の様子を描いたものである。鞘橋の下には、裸の男達が見られる。これは身を清めるために沐浴をしている風景である。橋の袂には高札場があり情報周知の場であったことも分かる。その他、宿屋や小間物屋、そして、讃岐だけにうどん屋なども見て取れる。

また、この図では描かれていないが、琴平町史によれば「橋上常に市をなし、鮮魚、青物、飲食物の出店あり」との記述がある。文献によっては、小道具、鮎、甘酒などを売る店もあったとされ、市民の生活に密着した橋であったようだ。

■ 神事専用の橋へ

鞘橋は現在、一般人が渡河することはできない。金刀比羅宮の祭典である例大祭のお頭人さんによる、10月10日深

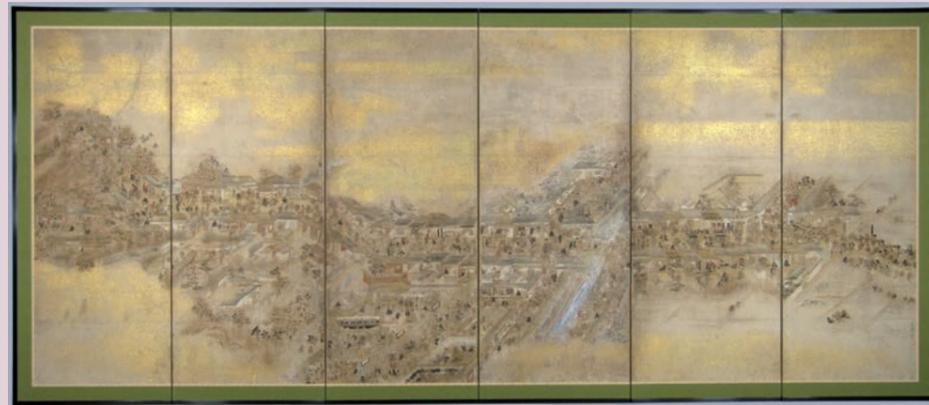


図2 『金毘羅祭礼図』(六曲一雙屏風の右隻)。右から三曲目に金倉川と鞘橋が描かれている(金刀比羅宮所蔵)

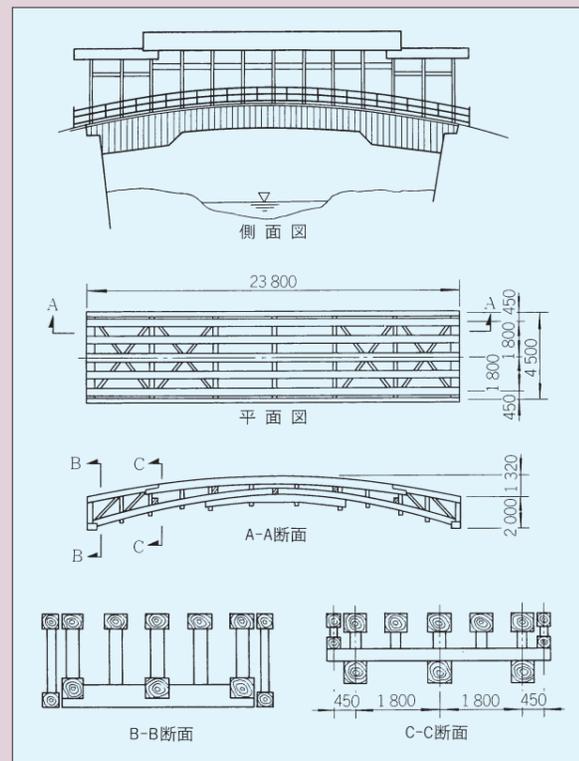


図3 鞘橋の一般図

夜の御神輿渡御、4月15日の御田植祭、9月8日の潮川神事の年3回のみで使用されている。これは、1905(明治38)年に行われた鞘橋の架け替えを契機としている。

実は、現在の鞘橋は先ほどまで述べていた参道ではなく、少し南にある金刀比羅宮南神苑の御神事場に架け替えられているのである。架け替えの理由は、時代とともに牛車や馬車が利用されるようになり、反り橋である鞘橋は不便であったとする説。琴平町近くの善通寺村(現在の善通寺市)には、乃木希典の義経(のぎまらすけ)で有名な第11師団が配置されていたが、

この参道が軍用としても重要視されるに至って、反り橋では馬車通行ができないため架け替えたとする説。軍隊の砲車を通すためには木造橋である鞘橋では耐えられなかったとする説など、諸説ある。

いずれにしても、この架け替えを契機に、鞘橋は神事専用の橋となった。

余談であるが、以前の場所には「一之橋」が架かっている。『町史ことひら』に橋の名前の由来とともに、「当時、地方では珍しく、鉄の欄干に石造りの斬新な橋が架けられた。琴平一の橋だった。木造り橋が多かった時代の旅人を驚かせた」と紹介している。名前については、金毘羅街道の第1番目の橋であるので「一之橋」とする説もある。

■ 400年の時を越えて

古くは金毘羅参りのランドマークであった鞘橋。象徴的なたたずまいから「橋廊複道」「複道彩虹」「浮橋」とも呼ばれた。商いの場であり、祝いの場であり、四国における道路元標でもあった。そして、神事専用の橋として今に至る。1998(平成10)年には「国土の歴史的景観に寄与しているもの」として、国の登録有形文化財(建造物)に指定された。

例大祭には、馬に乗った男児のお頭人さんと駕籠に乗った女児のお頭人さんに導かれ、御神輿をはじめとした約500名からなる行列が深夜の鞘橋を渡る。この御神幸の光景をこれまでも、これからも末永く守るために、鞘橋は金刀比羅宮によって定期的に点検・補修が行われている。

400年の時を越えて変わらないのは橋の反りと屋根。そして神事としての渡河と、それを見守る参詣者の眼差しであろう。

<参考資料>

- 1) 『町史 ことひら』全5巻 琴平町史編集委員会編 1995～1998年
- 2) 『琴平町史(第一集 琴平町史稿)』琴平町史刊行会 1970年
- 3) 『橋梁と基礎「香川県の橋—神社、仏閣近くに架かる橋—」木原克己』1987年8月建設図書
- 4) 『日本百名橋』松村博 1998年 鹿島出版会
- 5) 『讃岐の道ばた』古市寛 1963年 香川県道路協会
- 6) 金刀比羅宮ホームページ (<http://www.konpira.or.jp/>)

<取材協力・資料提供>

- 1) 金刀比羅宮

<図・写真提供>

- 図1、2、4、P42上、写真2、6 金刀比羅宮
 図3 参考資料3) 写真1 塚本敏行
 写真3左、4 徳武広太郎 写真3右、5 細谷州次郎



写真4 鞘橋の桁構造



写真5 唐破風の下の龍の彫刻



図4 『金毘羅祭礼図』に描かれた鞘橋



写真6 10月10日深夜、御神輿が鞘橋を渡る